

2014年

携帯サイトへGo!→
携帯で教室便りが見られます



公文式本市場教室 火・木 3~7時 TEL 186-61-4936(上平方)

横割教室 月・水 3~7時 TEL 61-8891(福島方)

指導者: 新妻ゆき子 携帯 090-2260-0671

Eメール: yvonne-yukiko@mbi.nifty.com

携帯アドレス: yvonne-1682-yukiko@docomo.ne.jp

ゆきこくもん

検索

ホームページ <http://www.yukiko-kumon.com>

教室だより 8月号

子どもを伸ばす「ほめ方」を考える

夏休みが始まりましたね。お子さまは充実した夏休みを過ごしておられますでしょうか。

お子さまとの接触時間が長くなるこの時期、あらためてお子さまを「ほめる」ことについて考えてみられませんか？
ここで、アドラー心理学を取り入れた星一郎さんのオススメほめ言葉をご紹介します。

☆人格ではなく、行動をほめる☆

「いい子だね」⇒「いいことをしたね」、「やさしいね」⇒「お友だちにやさしくできたね」

☆結果よりも、努力（プロセス）をほめる☆

「試合に勝って、えらいね」⇒「思い切って向かっていけたね」

「すごい！主役になるなんて」⇒「大事な役を引き受けたね。その勇氣、うれしいな」

☆他人と比較せず、その子の成長をほめる☆

「〇〇ちゃんより△△がうまいじゃない」⇒「去年よりずいぶん上手になったね」

☆YOUメッセージではなく、Iメッセージで話す、お母さまの気持ちを言う☆

「成績上がったね。やればできるじゃない。」⇒「あなたが頑張ってるの、お母さんうれしいな。」

いかがでしょう。お子さまにかけられるほめ言葉を工夫して、お子さまの反応を楽しみながら、お母さまの「ほめスキル」を上げていきましょう。

公文式の創始者・公文 公（くもん とおる）先生の言葉より

“どんな子どもにも、必ずできるところがある”

どんな子どもにも必ず「できる問題」というのはあります。例えば知的障害のあるお子さまであっても、できるところは必ずあります。それを発見できないのは、学年という枠にとらわれて、その子ができるレベルまで戻ることには抵抗を感じる親心がじゃましていると言ってもいいでしょう。また、できるということも、時間をかけてやっとできたというレベルではなく、時間がかかるようならまだ不十分だと考えて、思い切った後戻りをする勇氣も必要なのです。

『できない子』というレッテルを貼られた子どもは、長いこと「できる！」という感覚を忘れています。そうした子どもにとって「できる」「わかる」という感覚にもう一度めぐり会うことは非常に大切なことです。自分にとってできる問題、わかることが世の中にあるという発見は、大きな励ましとなるからです。

段階の違いこそあれ、どんな子どもにも必ずできる問題があること、それに気づかせてやるのが周りの大人に課せられた使命です。

2014年 8月の学習日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

本市場教室日□ 横割教室日△

晴れた日は外で畑を耕し、雨の日は家中で本を読む。
自分の思うまま、のんびりと落ちついた生活をする。

「おじいさんは、長い間はたらいた会社をやめてからは晴耕雨読の生活で、いつもおだやかな顔をしている。」

「おばあさんは、植木を育てたり本を読んだりする晴耕雨読の生活を楽しんでる。」

くもん出版刊「四字熟語カード」より

晴耕雨読

今月のことわざ

*ゆき子の一言コラム

子供の勉強、「やることリスト」がやる気をなくします。

「やることリスト」はうまくいかないようにできています。

「やったことリスト」に付け足して書いた「その勉強で得たこと」のポイントを見直すことで学んだことが復習でき、定着させることができるので一石二鳥です。「やったことリスト」に付け足して書いた「その勉強で得たこと」のポイントを見直すことで学んだことが復習でき、定着させることができるので一石二鳥です。「子供に勉強させるために『やることリスト』を作りましょう」ということを勧めている教育関連書籍がけっこうあります。でも勉強を後回しにしがちな子供にやるべきことをリスト化させ、優先順位をつけて勉強させようとしても、実際はほとんどできずに終わっているのではないのでしょうか。なぜなら「やることリスト」は子供のやる気のメカニズムを無視しているからです。

大人の仕事と子供の勉強は似て非なるもの

やるべきことをピックアップしてリスト化する。リスト化したらやるべきことの優先順位をつけてとりかかる。これは仕事を進めるうえでの基本です。でも、子供の勉強にこのやり方をあてはめようとすると失敗します。大人の仕事と子供の勉強は似て非なるものなのです。大人はプロとして仕事に取り組んでいます。プロである以上、やる気の有無に関係なく自分のパフォーマンスを最大限発揮して業務を遂行しています。一方、子供は素人です。素人ですから、やる気が出なければ勉強しません。周囲の大人が強制力を働かせれば勉強し始めるものの、監視がなくなればすぐに勉強をやめてしまいます。したがって、子供を自発的に勉強するようにさせるには「やる気」を高める工夫が必要です。

やらなくてはいけないことが多いとやる気がなくなる

子供のやるべきことをピックアップする過程で、多くの「やるべきこと」が挙がるはずですが、それらの項目は子供にとっては苦痛でしかありません。そのうえに、がんばりきれないほど多くの項目がリスト化されると、1つも手をつけずにすべて投げ出したくなるのが子供です。やるべきことは「1点集中」が理想です。1つに絞った方が子供は集中して取り組みます。どうしてもまだ他にやることがあれば、1つのことが終わった後に次の「1点集中」すべきことを決める、というようにすると子供は取り組みやすくなります。

とにかく終わらせるのが目的になる

仕事であれば、「質」を追求するよりも、とにかく期限までにその作業を「完了」させることが最優先であることも多いでしょう。子供の勉強は逆です。終わらせることよりも「質」が大事です。ところが「やることリスト」を作ると、とにかく終わらせることが目的になりがちです。子供の頃に問題集などの宿題の答えを丸写しした経験はないでしょうか。終わらせることが目的になると、「勉強」が「意味のない作業」になってしまいます。やるべきことを「終わらせる」よりも、「その勉強を通じて何かを得ること」の方が大事だということを伝えてあげてください。

やりきれなかったことの罪悪感を与える

「やることリスト」を作ってがんばらせようとしても、実際にはやり切れないことが多く出てくるはずですが、そうすると子供はやり切れなかったことへの罪悪感を持ちます。罪悪感とは「自分は勉強ができないんだ」と自信をなくさせます。大人に与えられた仕事は給与を得ているのでやらなければならない義務がありますが、子供の勉強はやらなくてははいけないことではありません。勉強には知らないことを知ったときの喜びや、わからないことがわかったときの快感があります。しかし強制されると喜びや快感を得られにくくなります。

したがって、「やることリスト」ではなく「やったことリスト」にしてみるのはいかがでしょうか。

その日に勉強したことを箇条書きで記録する。できれば、その勉強によって得られたことも書き足しておけば理想的です。自分が勉強し終えたリストなら子供は自分から見ようとしますし、見ることで達成感が得られます。その達成感が自信になり、新たなやる気につながっていきます。「やったことリスト」に付け足して書いた「その勉強で得たこと」のポイントを見直すことで学んだことが復習でき、定着させることができるので一石二鳥です。

さて、いかがでしたでしょうか。子供のやる気を出させようとしたら、子供が自発的に「勉強したくなるような工夫」をすることを考えてみてくださいね。

お休みのときは電話でもメールでも結構ですので連絡をお願いします。

7月分の会費引き落としは7月28日(月)です。よろしくお願ひいたします。□(注)休会・退会の場合は、引き落としの関係から15日までにお申し出下さい。最近 教室からお迎ひの電話をする子で、電話代を置いていかない子がいます。大家さんから電話代が足りないとお苦情がありました。お迎ひ電話を教室からする子には必ず電話代10円を持たせてください。